

## 開学2年目を迎えた法科大学院

### 平井宜雄院長に聞く

開学2年目を迎えた法科大学院。平井宜雄院長に本学の特徴と求められる法曹教育の姿を、院生には、これまでの印象や抱負を聞いた。

#### 成熟した議論の訓練を

「皆さん大変熱心です。欠席はほとんどありませんし、社会を経験した方が多いせいか礼儀正しい。学問に対するひたむきな姿勢は、こちらも身が引き締まる思い。ひとコマひとコマ、真剣勝負で臨んでいます」。自身も民法を担当している平井院長は院生、教員双方の濃密な授業への取り組みを語る。



市民生活に根ざした「社会生活上の医師」としての法曹育成を目指す本学の法科大学院は、少人数教育と対話型の双方向・他方向授業(ソクラテスマソッド)により、法的知性を徹底的に養う授業を旨とする。交通至便の東京・神田神保町にキャンパスがあり、昼夜使用可能な専用キャレルなど、院生が主体的に取り組む勉学環境が整備されている。そんな特徴が浸透してか、初年度は定員を大きく上回る志願者数を得るなど入試状況は好調だ。

06年から新司法試験が始まる。「もちろん合格者数は、評価の大きな要素ですが、何よりも基本をしっかり身につけた上で多様な分野の人々の要望に応える専門家を育てることが法科大学院教育の本来の意義ではないでしょうか。『人間性豊かな法曹を養成する』という我々の教育理念に共感している院生が多いことは、心強い限りです」。

今後、どんな法曹が求められるのか。

「これからは力でねじふせる強権の時代ではありません。議論によって問題解決をする人間が求められます。根拠を持って主張する、反論する、合意する。その積み重ねによって共に発見したものを引き出す。それが議論というものです。議論を成り立たせるには、想像力を養うための知的訓練が必要です。議論によって見えないところに気付き、人々の要望を同じ視線でくみ上げ解決する力量を持つ。そのような法曹に育ってほしいと願っています」。

## 英語資格試験による単位認定制度

### 今年度は82人が申請

今年度から、英語資格試験による教養英語の単位認定が始まり、左表の基準を満たした82人(上位基準31人・下位基準51人)が申請、教授会の議を経て単位認定されることとなる。

外国語第1部会長の小西恵美経済学部助教授に制度導入の意図・効果などを聞いた。

#### 学習意欲高める英語力向上を

導入の大きな目的は、英語学習に対する意欲を高め、英語力の向上を狙うことです。資格試験を目指してもらいたいのはもちろんですが、ある程度の英語力を持つ学生にとっては、必修科目を単位認定することで、上級の選択科目や英語特殊演習など、より高度なクラスに参加する機会を増やして英語力を伸ばすチャンスになります。

こうした制度を導入している大学は増えていますが、他大学との比較でも、上位基準はかなり高いレベルです。初年度で80人を超える申請者がいたことはうれしい驚きでしたが、それ以上に上位基準該当者が30人を超えた点に注目しています。数字で実力・向上度合いが分かるので「やる気」を高めるのでしょう。この基準を目標に頑張る、という学生が早くも現れています。

学部に関係なく申請出来ますので、全学的に活用してほしいと思います。そして、本学の留学プログラムに参加したり、国際的な職業を目指したりと、多くの「国際派専修人」が出てくれれば、部会に所属する私たち教員にとってもうれしい限りです。

## 春期日本語・日本事情プログラム

### カルガリー大生ら26人参加

2005年春期日本語・日本事情プログラム(4週間コース)が5月11日から6月9日まで行われ、カナダのカルガリー大学の学生を中心に26人が受講。日本語学習に励んだほか、歌舞伎鑑賞、ビール工場見学、鎌倉ツアーや二泊三日のホームステイも楽しみ、日本語と日本の理解を深めた。

引率した同大学の史子・サマレルさんは「東京周辺の大学での日本語学習プログラムに参加したいという願いがかなっての来日です。専大のキャンベーションパートナーの助けを借り、貪欲に学習に励み、大変、有意義なキャンパス生活を過ごすことが出来ました。ぜひ、来年以降も続けて受講したい」と話していた。



カルガリー大生を迎えて歓迎会  
(前列中央が大林守国際交流センター長)